～四旬節黙想会～

神様に対する信仰があるから苦しい時にも余裕ができ、ウイットに富んだ対応ができるのです。列聖された人だけが聖人ではなく、神様に受け入れられた人は皆聖人です。
ではどうするか。自分の仕事、お金を稼ぐ仕事ではなく、神様から任せられた自分の役目を果たすこと、これを聖化と言いますが、仕事を通して自分を聖化する、周りの人を聖化する。

一般に仕事ができるとは周りから評価されることですが、そうではなくて手抜きをしないことです。日常どんなことにも手抜きをしない事、これが聖化で「日常の聖化」の意味です。小さな事でいいんです。毎日自分のすることに手抜きをしない、怠け心に打ち勝って毎日することが聖化です。そうすると他の人に影響を与えます。そうやって他の人も聖化することができます。

では質問にお答えします。
Ｑ１：司教様のピンクの帽子なぜ落ちないんでしょうか。
Ａ１：司教の被っているこの帽子はズケットというんですが、もちろん落ちますよ。
ユダヤ人の男性成人はキッパという帽子をピンでとめているので落ちないんですが、司教はピンでとめていないので落ちるんです。これは聖職者が被るものなので司祭もかぶっていいんです。ただし司祭は黒なんです。司教は紫で枢機卿は真っ赤です。一番の天敵は風です。

Ｑ２：神様の目から見て「BE（存在）」と「DO（行い）」どちらがウエイトが大きいですか？
Ａ２：もちろん「BE（存在）」でしょう。私たちは善い行いもしますが、悪いこともしてしまいます。そのような時でも神様は私たちの存在そのものを良しとして下っていますので許して下さるのです。

Ｑ３：シノドスについて現状を教えてください。
Ａ３：シノドスについて？これはね、難しいんですよね。去年の 10 月に第１回期、今年の 10 月に第２回期があるんですが、こういうシノドスは今までなかったので正直私たち司教も戸惑っています。
シノドス的教会をどのように訳していいのか、共に歩む教会とか、共働的教会とか、導く教会とか、今年の３月に日本のシノドスをします。15 教区の司教様と司祭代表と信徒代表が集まって話し合います。それがシノドス的教会という位置づけなのですが、じゃあ小教区ではどのようにすればいいのか、まだ姿が見えてないんですが、小教区評議会とか信徒総会ですることはできるし、そのような方向に進んでいくのではないかと思います。

３月の日本シノドスの開催に向けてシノドスハンドブックというのが出ます。どのようにすれば霊による対話ができるのかマニュアル的なものが出ますので、各小教区でもそれに従った霊による集会を開催するようになるのではないでしょうか。

それと今は四旬節なので今日もミサの前に十字架の道行きをお祈りして下さっていましたが、イエス様のご受難と私たち一人ひとりの人生の辛いことをどう結び付けるのかがとても大事なことだと思います。私たちが受ける避けられない痛みとか苦しみはイエス様のご受難と寄り添うことができるチャンスなのです。イエス様は十字架を背負って歩まれた時、何を考えていたのか、誰のことを考えていたのか、それは私たちのことです。

イエス様は神様ですから 2000 年後の私たち一人ひとりの苦しみも分かった上で、私もあなたの苦しみを担っているのであなたもその苦しみから逃げないでくれよ、という思いで今も私の十字架を共に担っていて下さっているのだと思います。「十字架の道行き」とはそう言うことです。イエス様が私のことを思いながら、私の苦しみを感じながら歩まれたことを思い起こすのが、私たちの「十字架の道行き」の祈りです。